

〔目的〕今後の食生活の動向を考えた食教育を検討するために、若い世代の主婦の食行動を調査し、そのパターン化を試みた。

〔方法〕調査は幼稚園児385名及び保育園児269名の母親654名（回収率85%）を対象とし、1989年7月に実施した。調査項目は①母親の食事状況（食事の規則性・時間、食卓の雰囲気作り、外食・加工食品の利用）②調理状況（調理器具の使用、調理、行事食、保存食、衛生管理）③買物状況（買物行動・基準）など74項目である。これらについて統計的分析を行った。

〔結果〕主成分分析の結果、第一主成分の中で因子負荷の高い項目をみると上述①（食事の規則性・食卓の雰囲気作り）と②③の主な項目について望ましい値となっており、第一主成分は堅実でゆとりある食生活管理を表す成分と考えられる。第一主成分のみが高い固有値（5.576）であるが、第二主成分（固有値2.849）は④（加工食品・外食の利用）に関する項目で正の値となることから調理の家庭外依存を表す成分としてとりあげた。

第一主成分をⅠ軸、第二主成分をⅡ軸として654名中全ての項目に回答した母親495名について、個人得点を算出し各軸について座標の平均値と標準偏差を求めたところ、平均値はほぼ原点であったのでそこを中心として $\sigma/2$ で各個人を分類した。その結果、食生活への関心を高めたいもの92名（18.6%）、家庭内調理を実践させたいもの62名（12.5%）、食生活への関心を高め、家庭内調理を実践させたいもの36名（7.3%）で、全体の半数がなんらかの指導を必要としている。また、各軸とも $\sigma/2$ の範囲内に99名（20%）の人が分布しており、より豊かな食生活管理へ向けて今後の教育の重要性が示唆される。